

David Day, *Conquest: A New History of the Modern World*

(Sydney: HarperCollins, 2005)

木 畑 洋 一

本書は、2006年秋から1年間東京大学アメリカ太平洋地域研究センターの客員教授をつとめていた著者の最近作である。デイ氏は、イギリスとの関係を軸とした第二次世界大戦期のオーストラリアをめぐる三部作（1986年に出版された *Menzies and Churchill at War*、1988年出版の *The Great Betrayal: Britain, Australia and the Onset of the Pacific War, 1939-42*、1992年出版の *Reluctant Nation: Australia and the Allied Defeat of Japan, 1942-45* の三冊。これらは、2003年に *The Politics of War* として一冊にまとめて改めて刊行されている）で、広く名前が知られるようになった歴史家である。上記第二作のタイトル「大いなる裏切り」に示されるように、第二次世界大戦期に宗主国の支援を頼みにしていたオーストラリアがイギリスにいわば裏切られたとするデイ氏の議論は、1990年代前半に労働党のキーティング政権が、オーストラリアのイギリス離れを進めてアジアとの一体化を強めようとした際の歴史的前提としても、援用された。

ラディカルな歴史家としてのデイ氏のこうした力量は、1996年に著されたオーストラリアの通史、*Claiming a Continent: A New History of Australia* によって、さらに鮮やかに示されることになった。アボリジニが長年にわたって住みついてきた地としてのオーストラリアの性格を強調し、アボリジニの存在を中心にすえて、イギリス人が彼らからその大陸を奪い取っていった歴史としてオーストラリア史を描こうとするこの試みは、大きな反響を呼んだ。その本での議論の枠組みは、冒頭で次のように述べられている。

他の人々が住む土地に世界をまたいで入り込んでいく人の動きが常に存在し、こうして占奪した土地 (supplanted lands) への法的・実効的・精神的領有権を主張する行為がそれに次いで長期間繰り広げられてきたことが、人類の歴史を形づくる最も重要な力の一つとなった。過去200年の間にオーストラリアでこのプロセスがいかに展開してきたかを検討することは、ヨーロッパ人社会が次第に形づくられていき、ついにはこの島=大陸をのうのうと占拠するに至った道筋を理解する上で基本となる。

ここに出てくる占奪という言葉は、supplantの訳語であるが、その言葉を訳語として用いるに当っては、矢吹啓氏のアイデアを借用した。著者は、ある土地に他の土地から人々が到来し、それまで住んでいた先住民から土地を取り上げたり、さらには先住民を物理的に消滅させたりして、その土地を自らのものとしていく行為を占奪と呼び、そうして作られていく社会を占奪社会 (supplanting society) と名づける。そうした占奪社会が広がっていく過程をオーストラリアに限らず世界の各地域について検討し、そこから世界近現代史の姿を浮かび上がらせようとした野心的な試みが、本書 *Conquest* である。

本書は、1519年のスペイン人コルテスによるアステカの街テノチティラン侵攻の描写によって始まるプロローグと、11の章から成る。まとめと現状の説明にあてられた最

後の第11章を除く各章は、占奪社会が作られていく要素を網羅しており、次のような内容（章タイトルではない）となっている。

- 第1章：占奪の開始を示す儀式や標章設置なども含む占奪権の法的な主張
- 第2章：占奪地域を確定する地図の作成
- 第3章：先住民が呼んでいた地名に代わる占奪者側の地名付与
- 第4章：占奪の根拠となる先住民についての「野蛮人」イメージ
- 第5章：力による征服が占奪を正当化するという議論と、その議論のみでは不十分な場合に用いられる「文明化・近代化の使命」論
- 第6章：占奪した土地を守るための物理的障壁の建設、物理的障壁が必要ない場合でも力の誇示などによる土地防衛
- 第7章：占奪に歴史的背景があることを示す創世物語
- 第8章：土地を先住民が活用していなかったと主張しつつ自分たちによる土地利用・耕作をもって占奪を正当化する行為
- 第9章：先住民に対してジェノサイドを行おうとする動き（物理的ジェノサイドと共に文化的ジェノサイドも含む）
- 第10章：占奪社会への他の人々の流入

占奪社会ができあがっていく過程に、大きくいって三つの主要な側面があるということは、先に引用した部分からも分かるように、すでに *Claiming a Continent* で述べられている。すなわち、占奪対象の土地に関わる法的な権利の主張、実効的な所有の主張、精神的領有権の主張と呼べるもの、という三つである。その内、法的な面が本書の第1章で扱われており、実効的領有が第2章から第6章の主題となり、精神面が第7章と8章のテーマとなっている、と考えてよいであろう。第6章までの部分においても精神的要素は多分に含まれているし、7章と8章の内容は実効的要素にも深く関わっているため、各章を三つの要素に截然と分けることは無理であると思われるが、一応そのような構成をとっていることがみてとれる。さらに第9章、第10章は、占奪社会の中での人の抹殺、占奪社会への人の流入に関わる章であり、独自の部分を成している。

占奪社会についてのこの各側面が、近現代世界でどのように具体的な形をとったかということを証明するために、著者は実にさまざまな地域の事例を用いているが、その中で特に重視され、本書の各章でほぼ一貫して扱われている事例がいくつかある。一つは、いうまでもなく、著者が最も通暁し、*Claiming a Continent* で論じた経験があるオーストラリアの例である。そもそも著者が占奪社会という概念に行き着いたのが自国オーストラリアの歴史に取り組む中であったということを考えると、これはすこぶる自然である。またパレスチナ（占奪社会としてのイスラエル）や、ナチス・ドイツによるポーランド占領が随所で扱われていることも、問題の性質からいって当然のことといえよう。しかし、類出する例の内、ギリシア人が占奪社会を作ったマケドニアの場合と、日本人がアイヌから土地を奪って占奪社会を築いた北海道の場合が、なぜ議論の中心になっているかについては、説明が必要である。

まずマケドニアであるが、これは著者の妻と関わりがある。マケドニアには6世紀頃か

らスラヴ系の人々が住みマケドニア人としてのアイデンティティを形成し、20世紀初めまではオスマン帝国の治下にあったが、第一次世界大戦前のバルカン戦争後にセルビア、ブルガリア、ギリシアによって分割された。著者が力点を置いて扱うのは、この内、妻の故郷、すなわちギリシアによって支配されたマケドニアの地である。著者の妻の家族はそのマケドニアからオーストラリアに移住してきたのであり、本書のまえがきによると、妻はまだマケドニアにいた子供の頃、名前をマケドニア名であるツィラからギリシア名のヴァシリキに変えさせられた。オーストラリアに移住した後、父はまたツィラを使おうとしたが、学校でそれを認めてもらえず、イギリス風のシルヴィアと呼ばれるようになったという。本書が、「ツィラへ」という献辞を掲げていることとともに、著者がなぜマケドニアにこだわっているかの理由は、これで明白であろう。

北海道の場合は、それと理由がかなり異なる。著者は、1990年代の末に1年間、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の教授として駒場に在籍したことがある。すでに *Claiming a Continent* を出版した後で、本書の構想を練っていた時期であるが、著者はアイヌと日本の関係について強い関心を抱いており、滞在期間中に北海道旅行（その旅行体験の一端は本書でも234頁に示されている）を行った。その結果、占奪社会のモデルにきわめて適合する例として、北海道について多く記述することになったと思われる。

このように、中心的柱となるいくつかの地域が設定され、それに他の地域の多様な例が組み合わされて書き上げられた本書は、近現代世界史を振り返っていく上での、斬新な視座を提供している。本書の各章で焦点とされている内容も、すぐれた着眼点に基づいており、それらを総合して提示される占奪社会というモデルは、強い説得力をもっている。もとより、きわめて多くの地域、さまざまな事例が扱われていることから、それぞれの地域や問題の専門家が個々の事例について事実関係の誤りや分析の不備を指摘することは可能であろうが、本書の価値は全体としての歴史像の提示にあり、議論すべきはその全体像であろう。以下それに関わって、本書の読後に評者が抱いた感想を簡単に記しておくことにしたい。

最大の問題は、長期にわたる期間を対象としてさまざまな地域の事例が縦横に論じられていることから、世界史が時間軸にそっていかに展開していったかというイメージが希薄になっていることであろう。古代ローマ帝国や中世におけるイングランドのウェールズ侵攻についての言及などもあるが、本書の対象とする時代はおおむね大航海時代以降の期間である。それでも5世紀以上に及ぶ期間が取り上げられている。その期間の中で時間と地域を自由にとびこえながら、占奪社会のあり方について語ることは、確かに占奪という現象の特質と、それが多くの人々にとっての意味を明らかにする上では有効であるが、その反面、この間に世界がいかに変容し、それにこの占奪という問題がいかに関わったかという世界史像をもつことは容易でない。世界史の時間軸に即して対象の整理がもう少しなされていたら、と望蜀の念を抱かざるをえない。

また著者は、人類の歴史は人の移動の歴史であったという基本的な見方に立って、従来の植民地主義 (colonialism)、とりわけヨーロッパ列強による植民地主義という捉え方は、世界の出来事を論じる上では狭すぎるとして、占奪社会を植民地主義よりも射程の広い概念として提示している。しかし、たとえばインドや中国における植民地支配（中国は半植民地状態にあった）が占奪という概念で説明できないことを考えると（著者自身その

点はよく認識している)、占奪社会という概念を軸として近現代の世界を描いていくことには、無理があるのではないだろうか。むしろ、植民地主義や帝国、帝国主義といった概念で語られるものについての理解を豊富にする手段としてこの占奪社会概念を用いた方がいいのではないかと、評者は考える。

そのような疑問はあるものの、近現代世界で人類が体験してきた侵略や征服の問題を考えるための便利な手掛かりを本書が豊富に提供してくれていることは確かである。そのため本書は各地で広く読まれており、すでに韓国語訳などが出ているし、今年（2008年）にはイギリスとアメリカで新装改訂版が出版されるはずである。駒場と縁の深い著者のこの刺激的な議論が世界に広がっていることを、評者としては喜ぶたい。